



今年も一年が始まりました。はたして、どんな一年となっていくのでしょうか？私たちは混沌として不透明な社会を、生きにくい「いのち」を抱えてどこへ行こうとしているのでしょうか。

経済一辺倒に走り続けてきた結果が生み出した社会のアンバランスな姿は、見事に人間を不安と、恐怖の渦に巻き込んでしまっています。「もう、いい加減にして」。そんな声さえも、先へ先へと進んでいく奇怪で大きな力によって押しつぶされていってしまいます。

「21世紀は心の時代」と言われたことを、改めて思い出しますが、それはもう過去の、単なる「お題目」であったことを、愚かにも今、知らされたということになります。80%以上が山をくり貫くトンネルの暗闇を高速で走り抜けるモノルールに乗せられているような気分になってしまうのです。

鈍行列車の「車窓の景色」など、もうどうでもよいのです。やはり「時も金なり」なのでしょう。

光受寺観梅 2月下旬～3月上旬

今年の開花はどうやら早い？
暖冬の影響で、例年より半月以上
は開花が早くなりそうな気配。



同時開催の秀瑤書院展も、
写真展も予定が立てられなくて、困りましたが、2月27日
(土)～3月13日(日)といたしました。

新年のいあい

明けましておめでとうございませう。

一年を振り返ってみれば、昨年は暗黒ニュースが多くありました。政府は経済政策の施策を強引に押し進め、結果的には格差社会を造ってしまいました。それに伴って悲しい事件が多発し、多くの人命が失われてしまいました。特にイスマム過激派が起したテロ事件などは、宗教界全体のイメージを悪くしてしまいました。いかなる理由があるにせよ人命を粗雑にするなどはもつてのほかだと思われれます。仏さまからいただいた尊い命であります。報恩感謝の思いをもって生きてゆかねばならないと思えます。

今年こそは安全、安心して暮らせようという平和な社会を願っています。

そこには各界の指導者の皆さんが、今までの軌道を変える必要があると思えます。物から心に寄添うような方向に意識を転換すべきだと思います。

最後になりましたが、「門徒各位の平穏な一年を願って、新年のいあいとさせていただきます。」

責任役員 山崎 武志

同朋新聞の記事を読んだ

水野 龍一

十二月に入り、今年も終わろうとしている頃、同朋新聞をいただいて読んでみましたら、深く考えさせられる記事が掲載されていました。

大分県の三浦さん八十四歳の方の記事です。その記事の中に次のような一文がありました。

「こんな私でもお寺さんのために仕事をせしめらるるのかな」「と、そしてまた、

お寺の事をする様になして、いやな思いをした事は一度もないよ」とも。

私は、こんな受け止め方ができる三浦さんの人生は、本当にすばらしいなと思いい感激いたしました。八十四という高齢になられても毎日を大切に生きておられる生き方から生まれてくる思いが、言葉となって表れているのだらうな、と、いつかやましくを覚えました。

新年を迎え、少しでも三浦さんのような思いをもって、生かされていけるような生き方をしたいものだと思います。

報恩講

報恩講のお手伝いを通して思いの丈

お手伝い一員より



報恩講のお手伝いをされた皆さん、ご苦労をまじった。

私もその一人でしたが、たくさんの方と協力して準備し、手早くおこなうことができました。

報恩講にはお齋を準備するのですが、私たちが調理し、手作りの料理をいただくのです。これこそが、報恩感謝の心の表し方ではないかと感じています。

いじめるは、なぜ私たちがお齋の準備をするのか、と疑問に思っていました。

私みたいな者でも、お寺のお役にたつのかと思いついて、いじめるも気がなななは無くまりました。また、私たちのご先祖が、代々のお寺を「縁」としてあり、やがて私たちもお世話になつていじめるを思う時、五年に一回、いや十年に一回かもしれないけれど、私の出来る限りのいじめるを精進はつていじめるかなんか、いじめるをいじめる。

「道林」、「白楽天」の会話より

柴間隆文

昔、中国に「道林」というお坊さんと「白楽天」という詩人が居ました。ある時、白楽天が道林に尋ねたのです。

「仏教とは、どんな教えなのか」と。

すると、道林が答えました。

「悪いことをするな。善いことをせよ。自らその心を清くせよ。これが仏の教えである」と。

白楽天が「そんなことは、三歳の子供でも知っている」と怒ると、道林はこう答えたのです。

「三歳の子供でも知ってはいるが、八十歳の老人でも本当にそれを実践している者は誰も居らぬではないか」と。

これは、七仏通誡偈(しちぶつづうかいげ)という『法句経』の中に納められている「偈」の中の話です。

さて、ここで言う「善いこと」とは、どういうことなのでしょう。私なりに解釈をすれば、それは「命を大切にすること」のことなのです。しかし、私の日常を確かめてみますと、蚊を平気で叩き潰すし、毎日動物や魚を食べて多くの命を奪いながら生きています。しかも恐ろしいことにそれを何とも思わずに生きています。何と身勝手な思いだけで生きていますことでしょうか。まさに罪悪深重のこの身が、自覚されてくるのです。

人生の判断基準は、自分にとって得か損か、そんなことばかりを考えていっています。損をすれば恨み妬み、誰かを傷つけることさえも厭わない。健康であることと、お金に困らないこと、そんな人生が幸せの形だと信じて、ただひたすらに求め続けてきた人生でありました。

「道林」と「白楽天」の会話は、そんな私に人生を振り返るよいきっかけを与えてくれました。

さて、こんな私が子供に「人に迷惑をかけるな、思いやりを持って、命を大切にしてください」と言い切れるのかどうか、と考えてみる時、後ろめたい思いが、きっと口をつぐませてしまうでしょう。

お参りをしている私の脇で、二歳と五歳の子が意味も分からず親の真似をして喜んでいきます。

いつか、この子達が大きくなって、私と同じ悩みを抱える時がやってくるかもしれません。はたしてその時、この情景が記憶の片隅に残っているかどうかは分かりませんが、生きる意味も、命の尊さも、優しさも、全て阿弥陀如来の前にあることを、記憶の奥底から蘇らせ、幸せな人生の歩への縁としてくれることを願うばかりです。